

いちごの夜冷施設の昼夜2回利用と低温貯蔵の組み合わせによる施設の効率的利用

〔要約〕 定植日を同一とするいちごの夏期低温処理栽培において、夜冷処理施設を一日2回利用し、かつ夜冷短日処理終了後の花芽分化苗の低温貯蔵を組み合わせることによって、通常の4倍の苗を処理することが可能となり、処理コストが大幅に低減する。

園芸研究所・野菜花き部・野菜品種研究室

連絡先

092-922-4111

部会名	園 芸	専 門	栽 培	対 象	果 菜 類	分 類	普 及
-----	-----	-----	-----	-----	-------	-----	-----

〔背景・ねらい〕

いちごの夜冷処理施設を利用した夏期低温処理栽培において、定植日が同一の場合、通常1回しか処理できないことが処理コストの高い原因となっている。そこで夜冷処理施設の利用回数の増加を図り、1日2回処理と花芽分化苗の低温貯蔵の組み合わせによる処理コストの大幅な低減を図る。

〔成果の内容・特徴〕

夜冷処理施設を1日2回利用し、さらに花芽分化苗の低温貯蔵を組み合わせることによって、定植日を同一とした作型で施設の4回利用が可能となる。

①夜冷処理施設を1日2回利用する方法には、夜冷短日処理と昼冷処理の組み合わせ並びに午前低温短日処理と午後低温短日処理の組み合わせの2方式があり、いずれの方式によっても、いちごの苗の花芽は安定的に誘導される。

②花芽分化苗を0℃で15日間冷蔵しても収量に大きな影響はみられない。

③通常の使用方法に比べて1回当たりの減価償却費が1/4となり、処理コストを大幅に低減できる。

〔成果の活用面・留意点〕

①夜冷処理施設及び果実の予冷施設が利用できる生産者において、低温処理コストの大幅な低減に活用できる。

②気温が高い時期は花芽分化までの誘導期間が長くなるので、十分な低温処理期間を設け、処理終了時期は必ず検鏡結果をみて判断する。

③冷蔵期間中は乾燥による苗のしおれを防止するために、苗の温度が十分下がった後ビニルシート等で苗を被覆する。

